理論と論説

安中散加茯苓の茯苓の出典

小山 誠次

The First Recipe for Bukuryo (Hoelen) to the Kampo Formula,
Anchu-san-ka-bukuryo

Seiji KOYAMA

M. D., Fushimi Clinic, 3-318 Ginza-cho, Fushimi-ku, Kyoto City 612, Japan

Abstract The author's first paper entitled "The First Recipe for Amomi Semen to the Kampo Formula, Anchu-san" was published in Volume 47 Number 2 of the Japanese Journal of Oriental Medicine. In this paper, the first appearance of the crude drug Bukuryo (Hoelen) in the formula Anchu-san-ka-bukuryo, which is listed in the Standardized Drug Prices of Japan, is examined.

The only manufacturer of this product remarked that the 'Explanation of Clinical Applications of Kampo Formulas,' by Yakazu Domei, is the source of the formula Anchu-san-ka-bukuryo, since it includes the statement, "In many cases, Hoelen 5.0 is added." In the 'Hoizokucho,' published by Murase Toshu in 1889 (Meiji 22), however, it is noted that the addition of Hoelen to Ju fang Anchu-san is most suitable. In the "'Kokonhoi' and its Clinical Applications," published in Volume 2 Number 9 of the Journal of Kampo Medicine, Yakazu states that the 'Hoizokucho' can supplement the 'Kokonhoi', and that these two books are the best reference texts. It seems clear that Yakazu must have known about the presence of Hoelen in the 'Hoizokucho,' since the description of Hoelen in the 'Explanation of Clinical Applications of Kampo Formulas' appears to be based on the 'Hoizokucho.' Yakazu confirmed this to the author when asked about this point. These considerations suggest that the source of Hoelen in Anchu-san-ka-bukuryo is the 'Hoizokucho.'

Key words : Anchu-san, Bukuryo (Hoelen), Kampo extracts, 'Explanation of Clinical Applications of Kampo Formulas,' 'Hoizokucho'

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), **48**, 233-235, 1997

(Accepted : Oct. 29, 1996)

緒言

『日本東洋医学雑誌』第47巻第2号に筆者の論文「安中散の縮砂の出典」¹⁾が掲載された。その中で、茯苓については「……また別の1社は上記の

一般的処方茯苓を加味し、安中散加茯苓を安中散として製剤している。」とか、「……茯苓は安中散加茯苓として一般に用いられ、……」とか述べるに止めていた。

実際、安中散加茯苓は薬価基準に記載された医

医、伏見診療所、京都、〒612 京都市伏見区銀座町3-318

[1996年10月29日受理]

療用漢方エキス製剤のみならず、一般向けの薬局製剤としても販売されている。そこで、今回安中散加茯苓の茯苓の出典について独自に調査した結果を報告する次第である。本論文は「安中散の縮砂の出典」の姉妹編である。

本 論

I. 『臨床応用漢方処方解説』

「安中散の縮砂の出典」¹⁾では、今日最も一般的に我が国で処方される安中散に縮砂が加味されるに至った経緯と共に、安中散の我が国における歴史を踏まえ、原南陽は八味になる局方安中散加縮砂を一門の秘中の秘としていたであろうと論を進めている。それ故、原南陽による縮砂の独自の加味以外は、当時一般には安中散といえは局方安中散の七味を意味していたし、原南陽も局方安中散の薬味のうち牡蛎を3倍増量する工夫も凝らしていた。

一方、「安中散の縮砂の出典」で引用した文献にはことごとく茯苓の配合された安中散は収載されていないし、また加味方における茯苓の記載も見出せなかった。

そこで筆者は安中散加茯苓を安中散として薬価基準に収載している株式会社仁丹ドルフに茯苓の出典について問い合わせた。するとそのメーカーの回答は、矢数道明著『臨床応用漢方処方解説』に典拠するとのことであった。確かに、『臨床応用漢方処方解説』増補改訂版²⁾の処方の筆頭に安中散は収載されていて、そこでは「桂枝5.0 延胡索・牡蛎各4.0 小茴香2.0 縮砂・甘草各1.5 良姜0.7 (多く茯苓5.0を加える)」と処方内容が書き下されているので、同書をもって安中散加茯苓の出典に充てているのである。

実際、そのメーカーの安中散加茯苓は同書に基づいて製剤されたものであろう。しかし、1メーカーが典拠とした現代の書をもって直ちにその書を茯苓の出典とするには些か結論を急ぎすぎる。

一方、同書本文中には「動悸をともしやうものには茯苓5.0を加えるとよい。多くの場合この加減がなされ、安中散加茯苓といわれている。」との記載があるので、安中散加茯苓は安中散証のある人

で動悸症状を兼ねる人が適応という。すなわち安中散加茯苓は安中散証で動悸症状に対する兼用薬味を配した処方ということになる。

但し、そのメーカーの能書上は動悸については全く触れていない。

II. 『方彙統紹』

しかしながら、筆者はそれ以後も独自に調査を重ね、明治22年刊の村瀬豆洲著『方彙統紹』・翻胃³⁾に安中散が収載されているのを見出した。

そこでは、「安中散 局方 治遠年日近。脾疼反胃。口吐酸水。又治婦人血氣刺痛。小腹連腰攻症重痛。甘草 延胡索 良姜 乾姜 茴香 肉桂

牡蛎 加茯苓最妙 右七味為末。毎服二錢。熱酒調下。婦人淡酢湯調服。如不飲酒者。用塩湯点下。並不拘時。煎服亦可。(筆者訓読：安中散

局方 遠年日近ノ脾疼反胃、口ニ酸水ヲ吐スヲ治ス。又婦人ノ血氣刺痛、小腹ヨリ腰ニ連ナリ攻症重痛スルヲ治ス。甘草 延胡索 良姜 乾姜 茴香 肉桂 牡蛎 茯苓ヲ加ヘテ最妙ヲ為リ 右七味、末ト為シ、毎服二錢ヲ熱酒ニテ調下ス。婦人ハ淡酢湯ニテ調服ス。如シ酒ヲ飲マザル者ハ塩湯ヲ用ヒテ点ジ下ス。並ニ時ニ拘ラズ。煎服スルモ亦可。)」とあって、ここでは局方安中散の七味の処方に茯苓の加味が最も妙であると解説しているのである。

なお、ここでの条文は『校正方輿輓』卷之七・噎反胃癖囊 嘔吐惡心饑雜噎酸⁴⁾の安中散の条文と全く同一であり、方後の後条文も「煎服亦可」以外は全く同一であるが、最後に「煎服亦可」と付記されているのが、「安中散の縮砂の出典」でも述べた我が国独自の一般的工夫である。

結局、『臨床応用漢方処方解説』の初版より80年弱前に既に局方安中散加茯苓という処方があったことになる。

考 案

さて、矢数は『漢方の臨床』第2巻第9号の「『古今方彙』とその応用に就て」⁵⁾の中で、「恩師森道伯翁(昭和6年歿)の薬室常備の方書は本題の『古今方彙』と『方苑』の二書であって、最も屢々前者を以て規矩準繩としていた。その門に学んだ筆

者等は、師の遺風を受けて必然この書を座右に備えて来たが、それぞれの立場から、個々の経験を積むに従って、異った傾向を辿って来たこと勿論である。……筆者が現在薬室に備えて準拠とするところは師伝の『古今方彙』と共に、『類聚方広義』、『長沙証彙』、『治方佩訣』、『主証治方直訣』、『方彙統紹』等で、これらによって倉卒の間に適応決定の指針としている。……『古今方彙』は薬室常備方書として極めて便利である。然しながらこの書は『古今方彙』と銘打っているが、後世方が主で古方は従となっている。それ故『古方を主として後世方を運用する』ものの立場からすれば、村瀬豆洲の『方彙統紹』を合せて一書とすることが妥当である。」と述べ、『方彙統紹』が座右の書の1つであったことが明言されている。

従って、座右の書であるが故に、矢数はその内容を熟知していたはずであり、『方彙統紹』の安中散の記載事項から『臨床応用漢方処方解説』の安中散の項の「(多く茯苓5.0を加える)」に及んだものと思われる。

実際、筆者の推論の妥当性を尋ねる質問に対しても、矢数の回答⁶⁾はそれを肯定している。それ故に安中散加茯苓の茯苓の出典は『方彙統紹』である。但し、同書には安中散として局方の七味が採用されている。

筆者は安中散は腹部(上腹部、次いで婦人科領域)の冷え痛みの薬と理解している。一方、冷えによる腹部消化管の異常は多くの場合、消化管内に痰飲の貯留をもたらしうる。しかし、安中散に

は温裏薬、蠕動調整薬、鎮痛薬は配合されていて、消化管内の痰飲を化する利水薬は配合されていない。それ故に安中散に茯苓を加味する意義は充分あり、筆者は以上のような考えに基づいてエキス製剤安中散加茯苓を処方している。

結 論

安中散加茯苓の茯苓の出典は村瀬豆洲著『方彙統紹』である。

付記 本論文の要旨は平成8年度日本東洋医学学会関西支部例会(平成8年10月27日、神戸市)において発表した。

また、安中散加茯苓に関する筆者の質問に対して早々に御返事を下された矢数道明先生に対し、衷情より御礼申し上げる次第である。なお一層の御健勝を御祈念申し上げて止まない。

文 献

- 1) 小山誠次：安中散の縮砂の出典，日本東洋医学雑誌，第47巻第2号，289-295，1996
- 2) 矢数道明著：臨床応用漢方処方解説／増補改訂版，pp.5-6，創元社，1985
- 3) 村瀬豆洲著，大塚敬節・矢数道明編：方彙統紹／山本鹿洲・村瀬豆洲／近世漢方医学書集成60，p.391，名著出版，1981
- 4) 有持桂里著：校正方輿輓 卷之七，四十三丁表，河内屋源七郎，嘉永六年
- 5) 矢数道明：「古今方彙」とその応用に就て，漢方の臨床，第2巻第9号，8-13，1955
- 6) 矢数道明：私信

要旨 『日本東洋医学雑誌』第47巻第2号に筆者の論文「安中散の縮砂の出典」が掲載された。今回は薬価基準にも収載されている安中散加茯苓の茯苓の出典について検討した。製剤メーカーは矢数道明著『臨床応用漢方処方解説』の薬味記載欄に「(多く茯苓5.0を加える)」とあるので、この書に典拠するという。しかし、明治22年刊の村瀬豆洲著『方彙統紹』には、局方安中散に茯苓の加味が最も妙であると記載されている。矢数は『漢方の臨床』第2巻第9号「『古今方彙』とその応用に就て」の中で、『方彙統紹』は『古今方彙』を補完しうる書であり、両者他を共に備えて座右の書としている旨、記述している。それ故、矢数は『方彙統紹』のこの記載を熟知していたはずであり、『臨床応用漢方処方解説』の茯苓記載はこれに基づくものと思われる。実際、筆者の質問に対して矢数の回答もそれを肯定している。結論として、安中散加茯苓の茯苓の出典は『方彙統紹』である。

キーワード：安中散，茯苓，漢方エキス製剤，臨床応用漢方処方解説，方彙統紹